

自然博物館
ニュース

A·MUSEUM

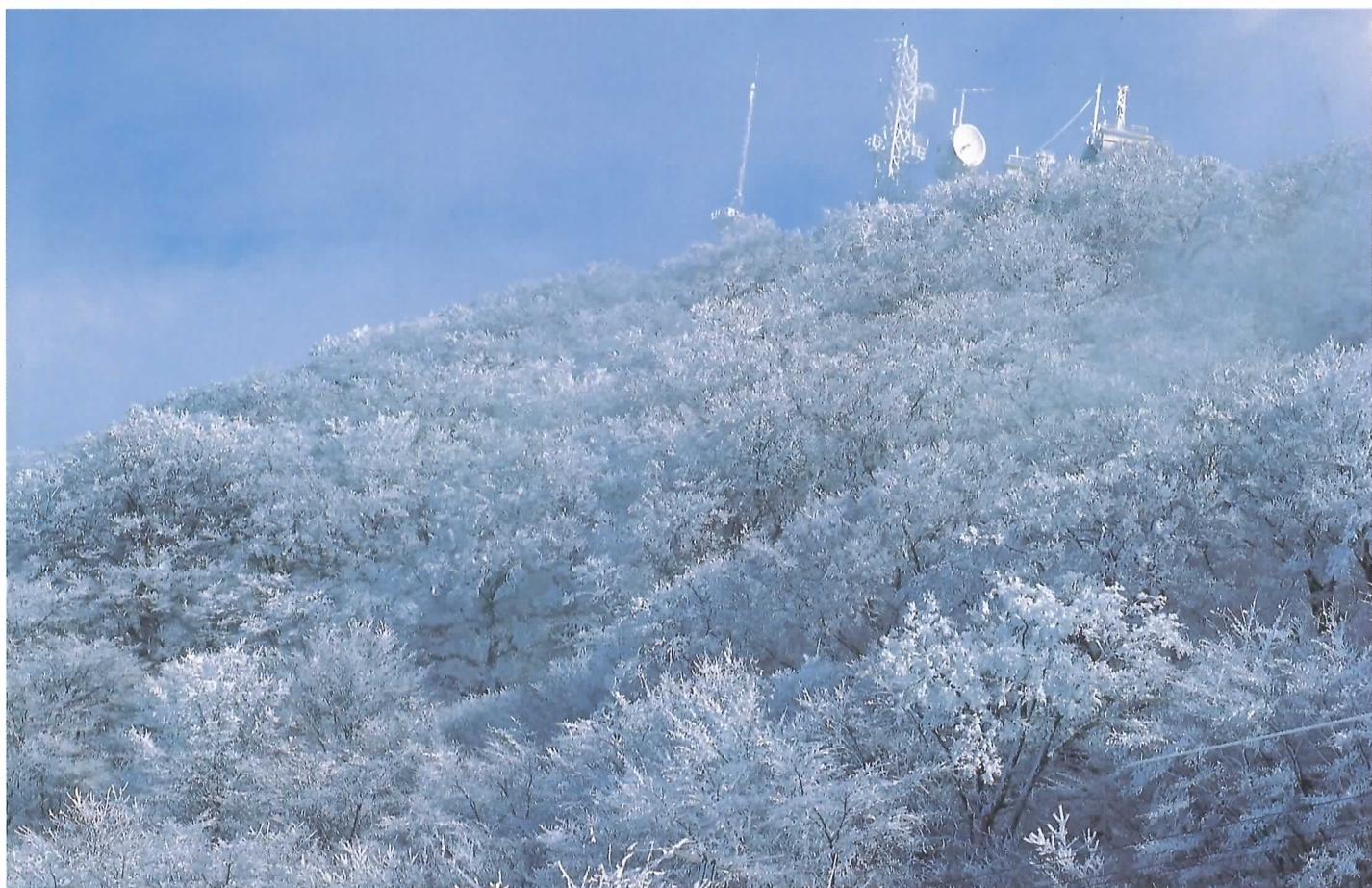
vol.14



ア・ミュージアム

ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



氷の芸術



これからの季節、茨城県内でも氷がつくり出す様々な芸術ともいえる景観を見ることができます。

霧氷は過冷却の霧粒が氷点下の樹木など地上の物の表面に付着してできた氷で、0℃前後から-10℃くらいのときに発生しやすいといわれています。上の写真では樹木に付いた真っ白な氷の芸術を見ることができます。

また、茨城県内ではシガと呼ばれるめずらしい現象が見られます。これはシャーベット状の氷が川を流れるもので、主に久慈川で観察されています。1月下旬から2月上旬の最も気温が下がる頃に、川の水面近くの石に氷が付き、それが川の流れによってはぎ取られ川面を流れています。

久慈川では茨城県と福島県の県境から大子町の袋田あたりまでの範囲でこの現象を見ることができ、昨年も5日ほど連続して観察されています。詳しいメカニズムは明らかではありませんが、温度と流水の速度の微妙な関係が作り出したもう一つの氷の芸術です。

上：筑波山頂付近の霧氷、下：久慈川のシガ

写真提供：茨城県総務部広報公聴課

(教育課：滝本秀夫)

写真で見る菅生沼の四季と移り変わり

菅生沼には今年もコハクチョウが飛来し、博物館からその元気な姿を毎日楽しめる季節となりました。第5回企画展「菅生沼の自然-1996」が開催されてはや2年がたとうとしています。その間、われわれ博物館スタッフは季節ごとに沼に出かけては継続的に各分野の調査活動を行っています。

今回は菅生沼の四季の変化をとらえることを目的として始めた定点撮影について紹介します。撮影地点は博物館の屋上と法師戸水門付近に数ポイント設置し毎月1回の割合で晴れた日に行っていきます。

撮影を続けるといろいろ興味深いことが分かりました。博物館の屋上からの撮影で、そのいくつかを紹介してみます。

ヨシ群落

ヨシ群落は、現在の菅生沼では約1/3と最も広い面積を占めています。3月中旬、景色には何の変化も見えないヨシ原に出かけると高さ5cmぐらいの小さいタケノコがツンツンと地面から顔を出していました。ヨシの芽です。

4月末になるとヨシは40~50cmに成長していますが、昨年の枯れたヨシの竿がそれを隠しているため、あまり景色の変化はありません。

5月末にはすき間に緑が見えていますが、まだ枯れヨシの方が目立ちます。ヨシ群落よりも水面に近いところに見える緑色のところはほとんどがマコモ群落です。この時期はヨシ群落とマコモ群落の境界を見分ける最適のシーズンとなります。6月末にはヨシも2mを越え、一面緑色の群落になります。

しかしヨシ群落の緑の季節は短く、9月になると黄色を帯び始め、11月には沼はすっかり冬景色になりました。

マコモ群落

写真②の右側、水際のわずかに緑色に染まりだした黒い部分はマコモ群落です。この年の2~3月には冬には、珍しくコハクチョウが沼の博物館側に多数訪れ、大好物のマコモの根茎を掘って食べました。しかし夏には例年と変わらないマコモ群落が復活しています。マコモはコハクチョウの食害にたいへん強い植物であることが裏付けられました。

アカメヤナギとタチヤナギ

菅生沼に生育するヤナギは、主にアカメヤナギとタチヤナギです。写真①の下



で緑色に芽を吹いているのがタチヤナギ、まだ全く葉をつけていないのがアカメヤナギです。両者の芽吹きに約1ヶ月のずれが見られました。4月中旬はこの両者の分布を見分ける絶好の時期です。

菅生沼の遷移は着実に進んでいる

下の横並びは、3カ年の11月の写真です。写真の左側から沼の中央にできた植物群落が徐々に拡大しているのが分かります。またヨシ群落もよく見るとわずかながら拡がっています。沼の陸地化と植物群落の遷移は確実に起こっています。

(資料課: 小幡和男)

②1996年4月23日撮影

黄色に見えるところが主にヨシ群落。右側の水際の黒い部分はコハクチョウに食べられたマコモ群落。写真下左の芽吹いているのがタチヤナギ。その右の枯れ木のように見えるのがアカメヤナギ。



③1996年5月25日撮影

前年の枯れヨシの竿が目立ち、ヨシ群落はまだ黄色に見える。マコモ群落は緑色をしている。



④1996年7月27日撮影

沼の植物群落は、全面深い緑色で覆われている。全体が緑色をしているのは7~8月の2ヶ月間だけである。



①1995年11月1日撮影

樹木は落葉樹もまだ緑色をしているが、沼の植物群落は一面黄色に染まった。
沼の白い点は飛来したコハクチョウ。

⑤1996年11月6日撮影

この季節から3月にかけて、降水量が少ないため沼に流れ込む水量も少なく、干上がった裸地が目立つ。

⑥1997年11月12日撮影

植物群落の遷移が徐々に起こっているようすが読みとれる。コハクチョウが菅生沼で越冬できるのはいつまでか?

研究ノート◎筑波山及び周辺の自然（3）



図1 筑波山頂付近のヒメボタル

筑波山の御幸ヶ原から出発する全長2kmの自然遊歩道に立てられている看板には、「筑波山に昆虫が多いのは……」ということがあります。しかし、筑波山の昆虫についてチョウ、ガ、甲虫などについて断片的な報告はありますが、まとまったものはありませんでした。博物館では'95～'96年を中心に筑波山の昆虫について調査し（未発表）、果たして筑波山の昆虫相の一端が見えてきました。その内容を含めて、筑波山の昆虫について見てみましょう。

●ブナ帯の昆虫

筑波山の頂上付近は、ブナやミズナラの林になっています。青森と秋田にまたがる白神山地のブナ林は、世界的にも貴重な財産として保護されていますが、それと同じブナが身近な筑波山でも見られるることは意外と知られていないのではないか？

ブナ帯を反映して、筑波山にも特徴ある昆虫が生息しています。ブナ帯を中心とした地域の花上に優占な種として知られるシラホシハナノミ、ブナを食草とするブナアオシャチホコ、マルモンシャチホコなどが今回の調査で採集されました。

山頂付近で特徴的な昆虫はヒメボタル（図1）やエゾゼミ、アカエゾゼミなどが挙げられるでしょう。ヒメボタルは陸生のホタルですが、生息域が限定されています。7月初めに成虫の発光が見られます（もちろん夜しか見られませんが…）。エゾゼミやアカエゾゼミはそのギーギーという鳴き声が特徴的です。夏季、中腹より上でよく耳にすることができます。

●アサギマダラの謎

筑波山にアサギマダラが多いことは有名です。夏は暑さを避けて山地や北ですごし、秋になると低地や海を渡って南に移る季節移動をすることでも知られています。博物館でもフジバカマが咲く頃、その花を訪れるアサギマダラ（図2）を見ることができますが、実は筑波山での生活史は解明されていないのです。年に何回発生するのか？この地で越冬しているのか？など、まだ謎が多いチョウなのです。

生態の解明には筑波山での数多い記録が必要です。目撃の記録をご一報下さい。

●筑波山のマルハナバチ

私は今年、筑波山中腹のハナバチについて集中的に調査しました。この付近の平地ではあまり見ることができないマルハナバチのコマルハナバチ、トラマルハナバチ、オオマルハナバチの3種類を確認できました。個体数が多いのは、コマ

ルハナバチとトラマルハナバチで筑波山での消長も見えてきました（図3、4）。調査地では約140種の植物の開花が確認されました。その中でも、コマルハナバチはモミジイチゴやエゴノキ、ウツギに、トラマルハナバチはヤマハギに多く訪れており、個体数の増減と訪花種の開花期が一致することも確かめることができました。

種名がはっきりしないマルハナバチも採集しました（図5）。1個体の採集なので、その生態などは明らかにできませんでした。作物の受粉に使われているセイヨウオオマルハナバチが逃げ出した可能性も含めて、今後さらに調査していく考えています。

万葉の時代より詩にも詠まれた筑波山ですが、その昆虫相の解明は始まったばかりといえるでしょう。身近な山の身近な昆虫を通して、環境について身近に考えていくたいと思います。

（資料課：久松正樹）



図2 博物館のフジバカマに訪れたアサギマダラ（今村敬氏撮影）

図5 筑波山で採集されたマルハナバチの一種

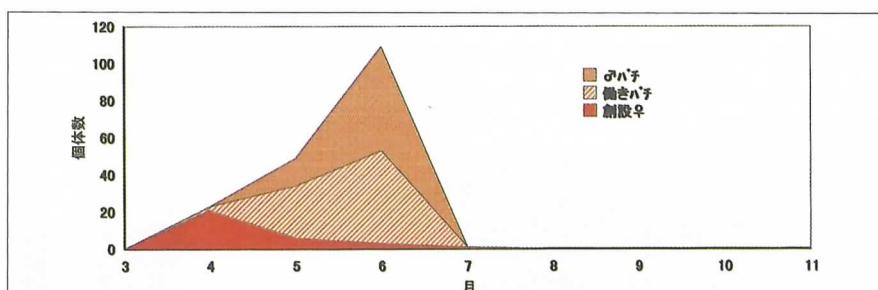


図3 筑波山中腹におけるコマルハナバチの季節消長（未発表）

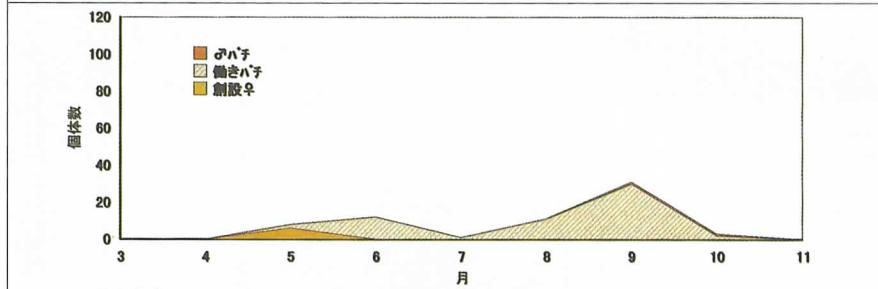


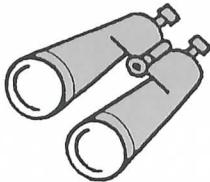
図4 筑波山中腹におけるトラマルハナバチの季節消長（未発表）

野外紹介●バードウォッキング

冬になると、菅生沼にはたくさんの鳥がやってきます。夏のあいだ、ロシアなどの北方で子育てをした鳥たちは、寒さを逃れて南へ移動します。ハクチョウやカモの仲間が菅生沼にもやって来

ぜひ双眼鏡の用意を！

野鳥観察をするときには、ぜひ双眼鏡を用意してください。肉眼では見えない遠くの鳥を観察する事ができます。そればかりでなく、鳥の細部の意外な美しさを発見することがよくあります。お持ちでない方は、野外発見工房で貸し出しを行っていますのでお気軽にどうぞ。



館で作成した水鳥のガイドブックです。希望者に配布しています。



▲屋上からは沼が見下ろせ、望遠鏡で対岸まで見渡せます。

館周辺の観察ポイント

博物館での観察ポイントをいくつか紹介します。本館ならば、屋上が最も適しています。備え付けの望遠鏡がありますので、水面にいるカモやサギが観察できます。野外では、菅生沼ゲート付近がよいでしょう。沼を一望でき手前のヨシ原を飛び回る小鳥たちや、湖面の水鳥が一度に観察できます。そして必ず足を運んでほしいのが、「ふれあい橋」です。橋の上からカモやハクチョウ、サギ類を間近に見ることができ、岸からは死角になりがちなヨシ原の間も観察できます。



▲ヨシ原の縁にも注目してください。

▶ふれあい橋は絶好の観察ポイントです。



て、湖面で思い思いに過ごしています。冬は、鳥の観察にはもってこいの季節なのです。天気の良い日、ひなたぼっこを兼ねて菅生沼の鳥を眺めてみてはいかがでしょうか？

こんな場所要チェック！

ただ漫然と眺めているだけでは、大きな鳥や、よく声を出す鳥にはばかり目がいきがちで、近くにいるのに気がつかないということがあります。鳥により観察しやすい場所がありますから、そこを注意深く何度も目をやるようにしてください。たとえば、写真の木の株や竹の棒の先には、よくカワセミがとまります。水が少ないとときに露出する手前の泥のところでは、チドリやセキレイの仲間が餌をとります。ガマやマコモなどの草の陰から、バンやカイツブリが泳ぎ出すのも見られるかもしれません。



この切り株は、ふれあい橋の中央東寄りから、北側に見えます。



▲ジョウビタキは、菅生沼ゲート下のヨシ原でよく見かけます。

のんびりと時間かけて！

動物園で動物を見るのとは違い、野外では期待通りに観察できるとは限りません。鳥の姿がなくがっかりしても、そういう時にこそ、あくせくせずのんびりと周りの景色を楽しんでください。人影に驚いて一度は飛び去った鳥も、害のない人間と分かると再度姿を見せてくれるようです。写真の橋脚にとまるカワセミは、まさにそんな時に突然現れたものです。脅かさないようにじっとしていたら、華麗なダイビングで餌をとるところを2度も見せてくれました。

(資料課：石塚 剛)



カワセミは意外に身近なところにいます。

歳時記●クリスマスとモミの木

クリスマスの季節ですね。クリスマスといえば、雪をかぶったモミの木が思い浮かびます。モミの木にはどうしても西洋の樹木というイメージがありますが、日本にもその仲間が自生しています。

その中でモミ (*Abies firma*) は、我が国の主に標高の低い山地に分布し、高さが20~30mにもなる常緑針葉高木です。それほど雪の多いところに生育して



モミ *Abies firma* (撮影:須田直之)

いるわけではなく、どうもクリスマスとは結びつきそうにありません。むしろ、日本ではやや標高の高いところに見られるウラジロモミ (*Abies homolepis*) がクリスマスツリーに用いられています。ウラジロモミは、モミが若い枝に短い毛があるのに対して全く無毛なので容易に区別できます。一方、本場のヨーロッパでは現在ドイツトウヒ (*Picea abies*) がクリスマスツリーに多く用いられていますが、これはモミの仲間ではありません。

また、本州ずっと標高が高くなり亜高山帯に入ると、モミの仲間としてシラビソ (*Abies veitchii*) やオオシラビソ (*Abies mariesii*) が見られるようになります。

この両者はよく似ており、同じ場所に混生することがあるので、区別するのはなかなかやっかいです。

茨城県自然博物館のある関東地方の平野部でも、雑木林の中などに、数は少ないながらモミを見ることがあります。そして、このあたりでモミと同じように線形の葉を持ち、大木になる木にカヤ (*Torreya nucifera*) があり、うっかりすると間違えてしまいそうです。しかし、モミの葉の先端はうさぎの耳のように二裂します。特に若い木では先端が鋭く、この特徴がよく分かります。一方、カヤは葉の先端が1本で針のようにつがっているので、注意深く見れば簡単に見分けることができます。

(教育課: 飯田勝明)



モミの葉

カヤの葉



収蔵品紹介●ティラノサウルス科の恐竜化石



ティラノサウルス(右)とユウオプロケファルス(左)



タルボサウルスの下顎骨



ティラノサウルスの歯化石

恐竜類は陸上に棲むは虫類で、骨盤の形がトカゲ類のものに似ている竜盤目と鳥類のものに似ている鳥盤目に分類されています。

ティラノサウルス科の恐竜は、肉食恐竜のグループである竜盤目獣脚亜目に属し、中生代白亜紀後期（約8,000~6,500万年前）の北アメリカとアジアに生息していました。

このなかまの恐竜には、ティラノサウルス、タルボサウルス、アルバートサウルス、ダスプレトサウルス、ナノティランヌスなどがあります。いずれも大型の二足歩行性の恐竜です。これらの恐竜類の特徴としては、大きな頭骨、ステーキナイフのような鋸歯縁（ギザギザ）のついた歯、2本の鉤爪をもつ前肢などがあります。

ティラノサウルスは、巨大な肉食恐竜を代表するような容貌から最強の捕食者とも考えられますが、腐肉食者か捕食者という食性については、研究者の意見が分かれるところです。また、頭骨、骨盤、上腕骨、血道弓などの特徴でオスとメスが区別できると考える研究者もいます。

当館で収蔵しているティラノサウルス科の恐竜には、カナダ産出ティラノサウルスの全身骨格（レプリカ）、アメリカ産出の歯化石、モンゴル産出のタルボサウルスの下顎骨・趾骨・脊椎骨、カナダ産出のアルバートサウルス歯化石があります。

(企画課: 國府田良樹)

開館3周年を迎えて

自然博物館は、館内展示と、県下最大の環境保全地域である菅生沼を望む野外施設が一体となった自然系総合博物館として開館し、今年の11月13日に開館3周年を迎えることができました。当館は、身近な自然に親しみ、そこから地球全体のしくみや成り立ちを知ることを目的に、見て、さわって、そして体験することに重点を置いた展示やイベントを行っています。おかげさまをもちまして、この3年間で、のべ187万の方にご利用いただきました。また、館で実施しているアンケート調査（平成9年5・8月調査）からは、2回以上来館している方が5割を超えていたことがわかりました。2回、3回といわず、何回来ても楽しめる博物館をめざして、これからも努力していきたいと思います。



ミュージアムコンサート



館長レクチャー

●これからも、皆さんと一緒に・・・

「3歳の息子が恐竜に興味があり、何度も来館しています。コンパニオンの方は、息子の質問責めにもいやな顔をせず、いつも息子の目線にまでしゃがんで、丁寧に説明して下さいます。今ではコンパニオンの方に会うのを楽しみに博物館に通ってきているようです。」－「あなたの声」より



これは、恐竜ホールに設置されているご意見承り箱に、来館者から寄せられたご意見です。日頃から来館者と接し、サービスに努めているミュージアムコンパニオンにとって、たいへん励みになりました。今後も、変わらぬサービスで来館する皆さんを、お迎えしたいと思います。

●皆さんに感謝を込めて／

11月2日の開館記念日（アミューズデー：開館は11月13日ですが、この日は館で独自に定めたサイエンスデーとなっているため、11月の第1日曜を開館記念日としています。）は、中川館長のレクチャーとミュージアムコンサートを、本館3階映像ホールで開催しました。中川館長の、開館3周年にちなんだ、3（さん：お産など）にまつわる動物の話には、参加した子供たちも大喜びでした。つづいて、地元筑波大学の学生の皆さんによるミュージアムコンサートを行いました。演奏曲には、開館4年目を迎えることから、ビバルディ作曲「四季」が選ばれ、雄大な菅生沼を背景に優雅な響きが映像ホールに響きわたりました。

中川館長、第33回茨城賞受賞！

茨城賞は、政治経済や地方自治、芸術文化、科学教育、社会福祉などの各分野で活躍し、それらの振興と発展に功績を残した個人や団体に対し、茨城新聞社より贈られるものです。今回、中川館長は、自然環境部門での初めての受賞となったことをご報告します。



コラム by director NAKAGAWA ◎カブトエビ

この夏、内モンゴル自治区博物館の四十周年記念式典に参加、姉妹館の署名式を行ったあと蒙古大草原を越えゴビ砂漠までの約400キロを走破しました。「一望千里」という言葉がありますが、まさに“広い”とか“大きい”とかいう感覚を実感したような気がします。

その途中で不思議な動物に出会いました。

大草原のまっただ中の道路わきの小さな水溜まりにそれはいました。体長僅か四センチほどの小さな生き物ですが、体の前半が甲羅状になっていて体には節目があり、二本の尾があってどういう訳か逆さになって活発に泳いでいます。学芸員によると、カブトエビと呼ばれる節足動物だそうで、祖先は二億年も前にさかのぼり、現在の姿とほとんど変わっていないということです。一望千里という広く大きい大草原の中の、小さいけれど、二億年という長い歳月を生きるカブトエビ、やはり中国は悠久の国なのです。



トピックス○ (9月～11月)

自然教室－菅生沼の水環境を調べてみよう－ 10月11日(日)

博物館に隣接する菅生沼で、身近な水資源を考える自然教室－菅生沼の水環境を調べてみよう－を実施しました。

最初は沼の水辺でのゴミ集めです。ゴミ袋を手に持ち、水辺を歩いたのは5分くらいでしょうか。瞬く間に空き瓶や空き缶などが集められました。そのゴミを分別しながら、ゴミはどこから流れてくるのか、なぜゴミが発生するのかなどを、参加した人々は真剣に考えていました。次に、水質の検査方法を学んだ後、菅生沼で採集したプランクトンを観察して教室は終了しました。



移動博物館で太陽観測 麻生町立麻生小学校

平成9年度の第4回移動博物館を10月22日から23日まで行方郡麻生町立麻生小学校で開催しました。近隣の学校の生徒・児童を含め978名の参加がありました。

移動博物館は、各種資料の展示・解説及び化石のレプリカづくりなどの体験学習を行



ってきましたが、今回は、新たに体験学習のひとつとして太陽の観測を行いました。太陽の観察をした後、学芸職員の黒点の説明などを興味深く聞き入っていました。

また、11月には、9年度最後の移動博物館が、県立霞ヶ浦養学校で開催され、今年度の事業は終りました。

視聴障害者のための特別展示

11月22日(土)～11月30日(日)

展示物に自由に触れるができる特別展示を、セミナーハウスで開催しました。昨年に続き2回目の開催です。動物・植物・地学の各分野から、計109点のさわれる資料を展示しました。視覚障害を持った方はもちろん、誰でも自由に観覧できるこの展示には、会期中のべ906名の方が見学に訪問しました。

見学に訪れた方たちは、トリケラトプスの巨大な頭骨(複製)や、タヌキ・キツネのはく製、材木の断面に刻まれた年輪などに手を触れ、その形や大きさ、手触りを丹念に確かめていました。



ホームページを開設しました！

10月1日に、待望のインターネットのホームページを開設しました。パソコンの普及はもとより、インターネット利用者も増加している今、自宅で、または学校で、自然博物館をご覧になることができます。インターネットで、今まで以上に博物館を楽しんで下さい。

●ホームページアドレス

<http://www.nat.pref.ibaraki.jp>



観察の記録

冬來たりなば 春遠からじ

資料課 五木田 悅郎

里紅葉の色も褪せ、一陣の木枯らしが吹き荒れると雑木林の梢が青い空に並び立ちます。

しかし、足もとに目をやると丈低い枯草の間や小さな裸地に葉を放射状に広げた草たちが緑を散らしています。ナズナもセイヨウタンポポもキツネアザミも種は違っても同じような形です。草丈を低くして寒風を避け、葉は間々に次の葉を広げ、外側ほど長く、冬のわずかな陽光をできるだけ受けようとする形です。その形をバラの花弁の組方に見立て口ゼット形と呼びます。こうして厳しい冬を耐え、春に花茎を立てて、夏には外の草たちが旺盛に茂る前に開花結実して、高温多湿な夏を種子で過ごすと言う巧みな生残り戦略です。口ゼットは丈高い草群や林の中には見られず、人により掘り返し、耕される場所に生き続ける放浪の植物たちです。多く古くは農耕文明と共に、近くは海外との交流によりもたらされた草原の草たちです。

こうして冬に耐える草たちにも、もう春の足音が聞こえてきました。



セイヨウタンポポ(左)キツネアザミ(右)撮影：服部仁一

インフォメーション(1~3月の行事)

自然観察会(定員40名)

- 1月25日(日) 茨城県植物園
『冬の樹木と熱帯植物の観察』
[小学生以上が対象です]
- 2月22日(日) 玉造町・北浦村
『地層を読む』
[小学4年生以上が対象です]
- 3月22日(日) 博物館野外
『冬から春の昆虫』
[小学生以上が対象です]

自然講座

- 2月8日(日)13:00~(定員300名)
『里山の生き物たち』
- 3月1日(日)13:00~(定員40名)
『絶滅が心配される植物たち』
[中学生以上が対象です]

えいが会(定員約300名)[講堂・映像ホール]

- 1月18日(日)『アメリカ物語2』
 - 2月15日(日)『魔女の宅急便』
 - 3月8日(日)『ひょっこりひょうたん島』
- 上映時間 14:00~ 入場無料

自然教室

- 1月10日(土)10:00~(定員20名)
『冬の鳥たち』
- 2月14日(土)10:00~(定員40名)
『植物の冬越し』
- 3月14日(土)10:00~(定員40名)
『石で遊ぼう』
[小学生以上が対象です]

[観察会等への申込方法]

2週間前までに電話で申し込んで下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選を行います(講座は先着順)。

ミュージアムパーク 茨城県自然博物館
TEL 0297-38-2000

サンデー・サイエンス【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリー・プレイス内のスタジルームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ

- 1月『木の実・草の実で遊ぼう』
 - 2月『小さな化石を見つけよう』
 - 3月『鳥の羽根のつくりを調べてみよう』
- 時間 午前の部 10:30~12:00
午後の部 14:00~15:30
(1・2月の冬季間は午後のみ実施)
- 受付 開始時間の1時間前から、スタジルーム前で受付ます。希望者多数の場合は抽選を行います。

自然なんでも相談

相談日	1月11日(日)
	2月8日(日)
	3月8日(日)
場所	ディスカバリー・プレイス観察カウンター
時間	14:00~16:00

その他のイベント

- 2月1日(日)まで 押し葉のしおり・押し花絵画コンクール
- 2月1日(日)まで 第7回いばらき自然環境フォトコンテスト
- 2月7日~4月8日 「(仮称) 海外調査報告展」
- 3月21日(土) サイエンスデー(宇宙・科学の日)

1月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

3月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

[交通案内]



- 常磐自動車道谷和原I.Cから20分。
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、東武野田線愛宕駅～茨城急行バス「岩井車庫行き」又は「岩井西校行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分。



ご利用案内

[入館料]

区分	本館・野外施設	野外施設のみ
大人	510円(410円)	200円(100円)
高校・大学生	310円(200円)	100円(50円)
小・中学生	100円(50円)	50円(30円)

(注) () 内は団体料金(20人以上)
企画展開催期間中については別料金となります。
つぎの日の入館料は無料です。

- 3月21日(春分の日)
- 4月29日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)

[開館時間]

午前9時30分から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

[休館日]

- 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)
- 年末年始12月28日～1月3日

野外とは別のもののように。「ミュージアムパークの・・」と言い換えると、このようなことがなくなることに気がついた今日この頃です。(S・O)

[編集後記]

「博物館のアンケートにご協力下さい。」「博物館は見ていませんよ。」当館では、来館者を対象にアンケートを行っていま

すが、このようなやりとりが時々あります。声をかけるのは野外施設の出口です。“ミュージアムパーク”的“野外施設”を目的に来館した方にとって、博物館は